



国立病院機構
浜田医療センター
院長
栗栖 泰郎 先生

医学生の皆さん、こんにちは。浜田医療センターは、島根県西部の中核病院として、医療法病床365床、運営病床347床で運営しています。当院の特色は、高度急性期病棟(救命救急センター)から、急性期病棟、回復期リハビリテーション病棟、地域包括ケア病棟、緩和ケア病棟まで、病状の各段階に対応した病棟を有していることと健診センターを有していることです。熱心な指導医と共に、急性期から在宅へ繋ぐまでの診療に携わることができます。また、15人の認定看護師、4人の特定行為看護師、3人の診療看護師が在籍して各医療チーム活動を牽引しており、医師も各チームから学ぶことができます。このような環境で、共に学び、成長していける医師を求めています。自分が治療に携わっ

た患者さんが、元気に回復して生活されている場面に会ったり、「あの時は…」と声をかけられたりした時ほど、地域医療に携わることができた喜びを感じることはありません。浜田の地で、一緒に地域医療を守っていきませんか？



国立病院機構 浜田医療センター
〒697-8511 島根県浜田市浅井町777番地12
TEL (0855)-25-0505 FAX (0855)-28-7070

第15回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会に参加して

令和6年6月9日(日) 医学科4年 篠田 航平 新城 圭史郎
医学科3年 岡 日輪乃
医学科2年 天願 由依菜

私たち地域医療研究会は、浜松市で開催された第15回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会に参加し、学生セッションでポスター発表を行った。

私たちは「アルコール依存症」をテーマに取り組んだ。内容は、浜田市金城町で開催された産業祭「さざんか祭り」のイベントとして行った健康増進活動の報告、来場者を実施した「AUDIT」(アルコール依存症スクリーニングテスト)及び、社会的孤立調査アンケートの結果を統計的に分析したものを発表した。

学会当日は、弥栄でフィールドワークに取り組んでいる鳥取大学の学生とも意見交換を行い、大変有意義な時間を過ごすことができた。

事前学習の場では、波佐診療所や西川病院の先生方々に多大なご指導ご協力をいただきました。また、スタッフの方々にも大変お世話になりました。ありがとうございました。



地域交流会



令和6年8月6日(火)
「大田市出身医師、医学生と大田市・大田市立病院との交流会」
学生 8名



令和6年8月3日(土)
「ごうつ地域交流会2024」
学生 4名



令和6年10月11日(金)
「市長と益田市出身の島根大学医学部学生との意見交換会」
学生 2名

今後の予定

Career Seminar

令和6年12月11日(水)
講師：一瀬 邦弘 先生
島根大学医学部 膠原病内科講座 教授

令和7年1月29日(水)
講師：高橋 勉 先生
島根大学医学部 血液内科 講師

令和7年2月予定
講師：鬼形 和道 先生
島根大学医学部 卒後臨床研修センター 教授

地域医療セミナー

令和6年12月20日(金)
講師：齋藤 稔哲 先生
気仙沼市立病院附属本吉医院 院長

令和7年1月24日(金)
講師：安田 康晴 先生
広島国際大学 保健医療部救急救命学科 教授

令和7年2月予定
講師：佐藤 優子 先生
浜田市国保診療所連合体 波佐診療所 所長

CHECK



WE LOVE

CONTENTS

- 活動報告
- セミナー報告
- リレートーク第49回
- 浜田の地で一緒に
地域医療を守っていきませんか？

国立病院機構 浜田医療センター
院長 栗栖 泰郎 先生

December 2024

地域医療支援学レター

vol.

49



丸山島根県知事表敬訪問

【場 所】サンラポーむらくも
【参加者】島根大学医学生 7名 鳥取大学医学生 3名

令和6年8月28日(水)

島根県のこれからの地域医療を支える令和6年度入学の医学部1年生が、島根県知事丸山達也氏への表敬訪問を行った。県知事からの激励を受け、島根県の医療への関心を更に高めることとなった。医学生全員が各々の決意を表明し「他の学生の思いを聞き心強かった」「決意表明したことで、これから島根で医師になるぞという思いが強くなった」等感想があった。学生達の地域貢献への意欲をさらに高め、病気の治療にとどまらず、患者全体に寄り添う医療を提供したいという思いを共有できたことはとても感動的であった。

丸山知事からの「人と人との繋がりを大切にし、知識と経験を積んでほしい」とメッセージを頂き、さらに1人1人の学生と県知事が一緒に写真を撮り、和やかな交流ができたことは学生達にとって心に残る経験となった。



ACTIVITY REPORT

活動報告



令和6年6月30日(日)13:00～17:30

第2回しまね総合診療の集い

【場 所】みらい棟4F ギャラクシー
【参加者】37名(学生 7名 医師 30名)

「The Diversity of GP」をコンセプトとして開催した今回の総合診療の集いは、たくさんの医学生及び医師に参加頂いた。

第1部は新専攻医の松井千佳先生、村上航太郎先生、三谷俊貴先生の自己紹介から和やかな雰囲気であった。その後、出雲市民病院の上村先生、やぶ医者大賞を受賞された波佐診療所の佐藤優子先生、島根大学医学部総合医療学講座の牧石先生が「患者さんのコンテクスト」について、全人的に理解することが重要と述べられた。

第2部は大田市立病院の石田先生とあさひ診療所の邊田先生が「EBMと臨床経験の振り返り」をテーマとして、普段の診療の中で自身が経験された症例をもとにプレゼンテーションされた。その後、医学生及び医師と活発なディスカッションが行われた。

島根の総合診療は全国的にも「熱く」今後も継続してフォローしていきたい。



令和6年7月16日(火)18:00～19:00

第1回えんネット交流会

【場 所】みらい棟2F 共通カンファレンスⅠ
【参加者】医師 5名 学生 1名

第1回えんネット交流会を開催した。少人数ながら、参加者同士が聞きたいことを自由に話し合うことができ、有意義な情報交換の場となった。保育園や子育てに関する情報を共有して驚くことや参考になることが多かった。普段あまり話す機会の少ない他科の医師や学生との交流を通じて、新しい縁が繋がった。

そして、ワークライフバランスをはじめとする様々な課題を共に話し合い、解決に向け、少しでも役に立つ良い情報交換の場となったと感じる。

仕事と家庭の両立に悩んでいる方や、体験談を知りたい方には、是非今後の交流会にご参加頂きたい。
お待ちしております。



令和6年8月28日(火)9:00～17:00

松江生協病院・松江赤十字病院・松江市立病院見学

【参加者】医学部1年生 10名

今年度入学の島根大学・鳥取大学の島根県医学生地域医療奨学賞と学生を対象に希望を募り、松江生協病院・松江赤十字病院・松江市立病院を巡るバスツアーを行った。

松江生協病院では、患者の回復を支援する地域密着型医療の現場を知り、医療の幅広さを実感した。松江赤十字病院では、島根原発から30km以内に位置し、原子力災害に備えた対応を学び、3次救急病院としての救命医療の重要性を強く認識した。松江市立病院では、がん治療に特化したケアや、中四国に4つしかないサイバーナイフの存在を知り、がん治療に対する関心が高まった様子であった。さらに、医師の「患者の不幸をもとに生計を立てることを当たり前にはいけない」との言葉が深く印象に残り、医療の社会的責任と医師の使命感を再認識する機会となったようだった。



令和6年9月2日(月)～10月4日(金)

研究室配属

【講座内発表会】令和6年10月2日(水)
【参加者】3年生 6名

地域医療支援学講座の研究室配属では、「①チーム医療・多職種連携の実践を理解すること、②地域の保健・医療・福祉・介護の現場を実際に見て体験し、地域包括ケアシステムや今後求められる医師の資質についてじっくりと考察し実践的なスキルを習得すること」を学習目標として掲げている。

今年度も6名の学生が、大学講義室から飛び出し多様なフィールドで実習を行い、診療所、訪問看護ステーション、保健所、消防本部、がんサロン、地域医療連携センター、大田市・浜田市に足を運び、地域医療の学びを深めた。報告会のプレゼンテーションでは、積極的な意見交換がなされ盛会であった。これからの学生生活、ひいては将来の地域医療実践に今回の経験が活かしてくることを期待している。



令和6年10月1日(月)18:00～19:00

ワークライフバランスセミナー

【講 師】株式会社Woman's 代表取締役 宮崎 結花 先生
【場 所】みらい棟4F ギャラクシー
【主 催】地域医療支援学講座
【共 催】島根大学附属病院ワークライフバランス支援室 島根大学ダイバーシティ推進室
【参加者】53名(学生 8名)

開催にあたってワークライフバランス支援室長より、当院のWLBの取り組みについてご紹介頂いた。

宮崎先生には、キャリアとは今までの歩んだ軌道であり、自分を知ることで自分らしい未来を生きることができるようになる。また、自分らしくやりたい事自分を明確化するメリットとして、主体的な行動になること、イキイキとした毎日になること、環境に働きかけられるようになることを教えて頂いた。

宮崎先生のセミナーを4年ぶりに開催し、前回はオンラインであったが、今回対面が叶い先生のエネルギー溢れる姿や、分かりやすいお話にみんなが引き込まれた。

今後もWLB支援室と協力しながら、職場環境の改善、仕事家庭の好循環を目指して活動を継続していきたい。



セミナー報告

SEMINAR REPORT



しまね総合診療の集い 学生参加支援

令和6年8月31日(土)～9月1日(日)

「Western Carnival」

～地域医療を支えるみんなとの繋がりを～

【場 所】済生会江津総合病院 他
【参加者】学生 7名



令和6年9月22日(日)～9月23日(月)

「オキフェス」

～総合診療医養成と地域医療の魅力を学ぶ会～

【場 所】隠岐の島町 隠岐病院 他
【参加者】学生 9名



地方大学基礎教授の挑戦

【実施日】令和6年7月18日(水)12:15～13:15
【講 師】島根大学 新興感染症ワクチン・治療用抗体研究開発センター
副センター長 浦野 健 先生

【参加者】25名(学生 6名)

概 要

浦野先生は長崎大学学生時代、テニスに明け暮れ、卒業後に長崎大学外科へ入局。様々な関連病院で消化器外科医として自己研鑽を積まれた。俗世間を忘れ病院に泊まり込み、全ての救急患者の治療にあたるという生活を送られていた。消化器外科医であったが医療の可能性を広げ、多くの人を救いたいとの思いで更に基礎研究へ進まれた。海外留学で研究者として多くの業績をあげられ、その後、恩師との縁があり名古屋大学生化学教室助手から助教授を経て、島根大病院生化学教授となられた。

メッセージとして「自分が何をやりたいかしっかり考え、自分の置かれた環境を最大限利用し、全力でtopを目指してほしい」と語られた。とてもお話が面白く、どんな状況でも楽しさを見出し取り組まれているのが印象的であった。

地域医療セミナー



令和6年度 第5回地域医療セミナー

【実施日】令和6年7月3日(水)18:00～19:00
【講 師】京都大学附属病院 総合臨床教育・研修センター
准教授 兼 しまね総合診療センター
副センター長 和足 孝之 先生
【参加者】51名(学生 30名)

概 要

和足先生は総合診療のトップランナーとして数多くの医学生や総合診療医の育成に尽力されている。離島での症例経験や東南アジアでの国際医療、海外留学など、数多くの経験を積み途中で苦悩や困難に直面してこられたが、いつも前向きに乗り越えてこられた。

「Neural GP network立ち上げ時は、しっかりビジョンを描き、綿密なアクションプランを作成して成功につながった」とセンター設立当時は振り返られた。

後半では医学生との熱いディスカッションが行われた。「物事は『嘲笑される』『反対される』『同調される』という3段階を経て成功する」というメッセージが印象的であった。セミナー終了後は和足先生のもとにたくさんの学生が殺到し、目を輝かせて総合診療医の魅力を語り合う姿が見られた。

Career Seminar



島根出身で何が悪い？ 「～島根から神戸へ、そして再び島根へ 戻ってきた循環器内科医の道～」

【実施日】令和6年9月13日(金)12:15～12:45
【講 師】島根大学医学部 循環器内科
診療助教 岡田 大司 先生

【参加者】21名(学生 10名)

概 要

先生は本学の卒業生で初期研修を当院で受け、後期研修を約1年間神戸市立医療センター中央病院で受けられた。先生は卒業当初、整形外科医を志されていたが、初期研修の最後に受けた循環動態の研修で虚血性心疾患に対するカテーテル治療の面白さや、やりがいを感じられ、そこから循環器医を目指すされた。神戸では島根で経験し得ない学びと、今日に繋がる貴重な出会いを得られたそうである。

最後に「準備はしておこう。チャンスはいつか訪れる」と、学生にメッセージを送られた。「いつでもチャンスを掴めるよう努力し続けることが成功に繋がる」と理解した。また、タイトルの「島根出身で何が悪い？」の先生の回答は「悪くない」であった。自分次第でどこでも成長できる。基礎を作った外に飛び出すのも悪くない。常に準備しておくことが大切であるとまとめられた。



褥瘡×在宅×多職種連携 ～在宅の実情と多職種の役割を理解しよう～

【実施日】令和6年10月8日(火)18:00～19:00
【講 師】Grow訪問看護ステーション
佐藤 千晃 先生
おおた皮膚科クリニック皮膚・排泄ケア特定認定看護師
清水 美穂子 先生
【参加者】46名(学生 17名)

概 要

今回の講演では、褥瘡ケアにおける多職種連携と在宅療養支援について実際の症例を基にお話し頂いた。清水先生は、認定看護師の立場から褥瘡の要因除去や対策、在宅ケアの重要性とチーム連携の必要性を示された。また、発赤が褥瘡の重要なパラメーターであることを指摘し、在宅での観察方法やケアの統一についても提言された。佐藤先生は作業療法士として、褥瘡の発生要因を体位や創面から分析し、予測の重要性を述べられた。さらに、「客観的な評価指標の定着」「ケア方法の統一」「主治医との情報共有の難しさ」「地域における特定行為の未実施」などの在宅ケアの課題を提言された。

この講演は、学生や医療従事者にとって、多職種連携の現場での重要性を学ぶ貴重な機会となり、またお二人が島根大病院で働かれていた現役時代の姿を懐かしく思い出す時間となった。

私を動かした、たくさんの言葉

【実施日】令和6年10月22日(火)12:15～12:45
【講 師】島根大学医学部 AYA世代サポートセンター・
医療的ケア児支援 センター長 安田 謙二 先生
【参加者】27名(学生 19名)

概 要

今回、先生の豊富な経験に基づいた「言葉」の力について深く学ぶことができた。先生は、言葉が持つ力、そして言葉が人々をどのように動かすかについて、自身の経験を交えてお話しされた。

学生時代に同期生の一言がきっかけで小児科を選択された先生は、国立循環器病センターでの研修中、上司の「仕事は楽しく」という言葉に励まされ、困難を乗り越えられたそうである。その後も、言葉の力を信じて、様々な挑戦を続けて行かれた。講演を通して、先生は「言葉に対して、素直で謙虚な気持ちで耳を傾け、そこにある思いを見出す」「正しい言葉で、正しく思いを伝えるように心掛ける」という2つの重要なメッセージを伝えられた。このメッセージは、私たちの今後のキャリアにおいて、大きな指針になると思われる。

先生の言葉の一つ一つが、私たちの心に深く響き、使命感と責任感を改めて感じさせて頂くことができた。